

京都大学地理学談話会

会 報

第 37 号



2026

[目次]

寄稿

ご逝去から早や 30 年の水津一郎先生を偲んで	(戸祭 由美夫)	1
「ただの宿泊」を「土地との対話」へ ーオーベルジュが誘う五感の旅ー	(古田 祥未)	4
中小規模公園における Park-PFI 制度の導入と課題 ー東京都 A 公園を事例としてー	(岩下 隼人)	7

2025 年度活動報告

秋季談話会（交流会・総会）	10
春季談話会（論文発表会）	11

研究室便り

地理学専修の動静	12
2025 年度卒業生・修了生の進路	12
新メンバーの自己紹介	12
大学院生らの研究状況	15
2026 年度講義題目	15
会員からの寄贈図書	16

事務局から

2025 年度会計報告	17
会費納入のお願い	17
訃報	17
会員通信	18
編集後記	18

(表紙) 富山新港から立山連峰を望む (3 回生・井上 駆さん撮影)

ご逝去から早や 30 年の水津一郎先生を偲んで

戸祭 由美夫*

京都大学文学部地理学教室に専任教官として 1959~1986 年の長期にわたってご在職された水津一郎先生が 1996 (平成 8) 年にご逝去されてから早や 30 年。私 [戸祭由美夫] が文学部史学科人文地理学専攻の 3 回生として初めて水津先生にお目にかかり、その授業に出席させていただいたのが 1967 (昭和 42) 年 4 月でした。以来、学部生として、大学院地理学専攻に進学してからも修士課程、そして博士課程の院生として、1973 年 4 月に先生のご推挙によって鳥取大学教養部の初代地理学担当専任教官になるまで、6 年間にわたって文字通りご指導・ご鞭撻をいただきました。その後も、学会で、あるいは年末にご自宅に参上してお目にかかったりして、親しくご指導をいただきました。のみならず、私の結婚にあたっては久美令夫人とご媒酌の労をとっていただき、まさしく公私ともお世話になりました。

すでに、学部卒業・大学院進学ともに同期の金田章裕氏によって、水津先生に対するアカデミックな追悼文が『人文地理』48 巻 5 号 (1996 年) 巻頭の 2~4 頁に掲載されていますし、京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部 地理学教室百年史』の「第二章 歴代教授の地理学観」に「5 水津一郎」(97~110 頁) が収載されています。そこで、金田氏の追悼文や教室編の公式刊行物とは異なる、私なりの経験をもとに、水津先生に対する追悼文

をこの会報に編集責任者のご承諾を得て投稿させていただくことにした次第です。

私が初めて水津先生の授業を受けたのは、必修である「外書講読」と「特殊研究」でした。そのうちの「外書講読」は、私が教養部でドイツ語を選択 [L 3] していたので、先生がご担当のドイツ語講読を受講しました。テキストとして前期には、景観地理学の泰斗たる Josef Schumithüsen の論文 "Was ist Landschaft" が指定され、後期も同様の Landschaft 論の論文が課せられました。一方、「特殊研究」では、先生のドイツでの在外研究に基づく最新の内容がノート講義でなされ、私のノートには「ラインの地理学」と名付けていますが、古代ローマ時代にローマ辺境のライン川~ドナウ川間に設けられた防塁列 Limes の具体例を示されている内容で、高校で世界史を得意とした私にとっても初めて耳にする興味深い内容でした。3 回生では、ほかに、地理学教室の 3 先生が引率・指導された「地理学巡検」(いわゆる教室旅行) への参加も課せられました。当時は、人文地理学会の特別地方例会に合わせて実施され、広島大学の野外巡検バスに乗せてもらった後、下関(泊)~杖立温泉(泊)~阿蘇の内輪山~久住長湯温泉(泊)~別府~瀬戸内海フェリー(船中泊)で帰京というコースでした。その後も、水津先生には毎年の「特殊研究」や、東四国や山陰横断の「地理学巡検」などご指導いただきました。

* 奈良女子大学 名誉教授、1969 年卒業

学部・大学院の6年間で思い出深いのは、教授ご昇任を控えておられた水津先生の学位論文のご提出の件です。先生は早くも『社会地理学の基本問題』というご著で、生活空間の「基礎地域」論を提唱され、その新訂版を学位論文として提出されるのではないかとの噂もありましたが、上記の「特殊研究」での内容も含めた『社会集団の生活空間—その社会地理学的研究—』という460頁の大著を新たに上梓されて、1971年に文学博士の学位を取得されました。当時は、教授昇任予定の先輩の学位取得が確実になってから、しかるべき先輩も学位論文を提出するという暗黙の了解があったようで、その後、末尾至行・浮田典良・矢守一彦の3先生も慌しく学位論文を完成・ご出版になりました。

私が博士課程に進学した1971年度の当初、織田武雄先生の後任として水津先生が地理学教室の主任教授にすぐには昇任されませんでしたため、水津先生が助教授として教室運営にあたられました。そのために先生はご多用で、毎年担当される「特殊研究」はなさいませんでした。そこで、2回生も受講できる「地理学概説」のお手伝いがてら、博士課程の私が受講させていただき、水津先生の生活空間論をじっくり伺うことができました。水津先生は1971年11月付で、目出度く文学部教授にご昇任になりました。

大学院では、地理学教室へのご要望に応じて、院生が授業担当の非常勤講師として当該校によせていただく場合も多く、私は幸いに当時の院生数名による籤に当たって、同志社女子中・高等学校へ授業担当の非常勤としてよせてもらいました。当時、なお大学紛争中で、学内に入ることもしばらくできず、大学院生の自主的ゼミも学外で行っていたほどで、同高の地理担当教員お二人がともに京都大学

地理学ご出身の先輩だったこともあって、気持ちよく非常勤講師を続けさせていただきました。さらに奇しくも、水津先生もお若い頃に同校に非常勤講師をなさっていたそうで、社会科教室の地理以外の先生方の中にも当時の水津先生を覚えておられる方さえありました。

そのような中、水津先生から、鳥取大学教養部から地理学担当の専任教員をお探しで推薦を依頼されているので応募しないかとお勧めをいただき、1973年4月から鳥取大学教養部に専任講師として採用されました。誠に幸いなことに、赴任した鳥取大学教養部の社会科学系列のスタッフのほとんどの方のみならず、他の系列のスタッフの方々からも大変温かく接していただき、のびのびと研究・教育をさせていただきました。この点、ご推薦くださった水津先生に今も心から感謝しております。

その5年後、奈良女子大学文学部からご指名をいただいて、私は人文地理学講座の助教授として1978年4月に鳥取大学から転出することになりました。水津先生はその時点までに、上記の御著書2冊に続いて『石の文化・木の文化—ヨーロッパ文化の地理学—』・『地域の論理—世界と国家と地方—』・『近代地理学の開拓者たち—ドイツのばあい—』・『ヨーロッパ村落研究』と次々と出版になるとともに、お住まいも京都市東山区山科（現、山科区）から宇治市広野町に変わられました。

1980年に国際地理学会日本大会が東京で開催された際、水津先生は京大会館において開催のプレコンGRESの地理思想史部会で、一橋大学の竹内啓一教授と共同オーガナイザーとして運営を主導されました。私もその部会で発表させていただきましたが、その成果は "Geographical Languages in Different

Times and Places”と京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』の2冊にまとめられました。このIGC部会での先生のご尽瘁はひととおりでなかったと申せましょう。

先生はその後、『地域の構造—行動空間の表層と深層—』をご発表になる一方、大学では京都大学文学部長・文学研究科長を2期されたほか、学会関係では人文地理学会会長3期や史学研究会理事長、さらに日本学術会議会員・人文地理学研究連絡委員会委員長もなさり、本当にご多忙でいらっしやったと拝察します。

先生は京都大学を1986年3月に定年ご退官された後、奈良大学に文学部教授にご就任になり、科研の共同研究の代表者として報告書も刊行されましたが、ついには奈良大学学長にも選ばれてご就任になりました。そのような中にも、先生の地理学に対する真摯な傾倒は続き、『景観の深層』と『甦る地理の思想—ルーツに学ぶ—』をご出版にられました。特に後者は、学長としての入学式の式辞を新書としてまとめられたものでしたが、先生のこれまでのご研究の精髓をお示しになった内容と申せましょう。

以上のような先生の数多くのご著書を私の書庫で改めて開いてみますと、そのご著書の扉には、私のような若輩の教え子に対して、「謹呈 戸祭学兄」という文字が「水津一郎」というサインとともにいただいています。その扉を見るたびに、今も先生のお気持ちをありがたく思い出している次第です。

さて、先生のご自宅には、京都市東山区山科にお住いの頃から参上させていただいていましたが、そのたびにお相手くださる久美令夫人のおやさしいお気持ちを感じるとともに、先生の前で緊張する学生の私の前に、お若いお嬢さんがソファのご両親の間にチョンとお

座りになっていたことを思い出します。そのような雰囲気は、宇治市広野町のお宅に伺うようになって後も同様で、上述の1980年の京都府会館で開催されたIGCの地理思想史部会には、ご成長されたお嬢さんがその英語力を生かして振り袖姿で先生と同道されていたのを思い出します。

ところで、私が大学宿舎から平城ニュータウンに引っ越したころ、ご結婚されたお嬢様のご一家もニュータウンの同じ地区にお住まいになり、偶然にも、そのご長男（つまり、先生ご夫妻のお孫さん）と私の長男とが同じ幼稚園・小学校に同学年として通園・通学するようになって、その縁で顔を合わせる機会も多々ありました。そして、今やそのご長男は、公共政策・社会学者としてマスコミでも登場しておられます。

先生がご逝去後、私の著書を宇治市のお宅に持参した際には、令夫人様が先生のご霊前に御披露くださいましたが、その令夫人様との連絡もコロナの影響もあってか不通となり、残念ながら白寿を前にして2024年にご逝去された由です。

先生は、終生、地理学の探求一筋でいらっしやいました。京都大学文学部地理学教室の責任者として、意味もなく徒党を組むことを嫌われましたが、一方、大学紛争でご苦勞もされたにも拘わらず、学内の人事や他大学への院生の推薦には私的な好悪を消して実行なさっていたことは、改めて明記させていただく次第です。

「水津先生、あの世で先生ご夫妻とご一緒にお会いできれば、ヨーロッパ各地の印象やお孫様がたになどついてお話を伺いたと思います。その節はどうぞよろしく。」

（2025年9月1日校了）

「ただの宿泊」を「土地との対話」へ

——オーベルジュが誘う五感の旅——

古田 祥未*

〇はじめに

ワインについて語る、というと、皆さんはどのような情景を思い浮かべるでしょうか。薄暗いバーや洗練されたレストランの片隅で、グラスを回しながら「この香りは……」とウンチクを述べるような、少し気取ったイメージを持たれるかもしれません。しかし、ワインという飲み物の面白さは、決してそうした形式的な作法の中にあるわけではありません。地形や歴史、生産者の背景といった人文地理学的な観点から、醸造過程における微生物や化学変化など生物学や化学的な観点など様々なアプローチができるのです。

現在の私はソムリエとして、その土地の風土や歴史を食と結びつけることで、訪れる人々にその場所でしか味わえない感動を届ける仕事をしています。本日は、私の仕事の舞台となっている「オーベルジュ」という場所、そして「土地」を表現する上で非常に重要な役割を担っているワインについてお伝えすることで、私が体感している「地理学」についてお話ししたいと思います。

〇オーベルジュとは？

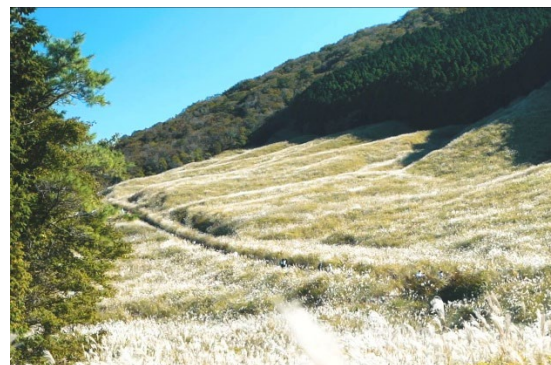
私のワインとの出会いは、2014年に箱根の小さなオーベルジュに就職したことから始まりました。

「オーベルジュ (Auberge)」とはフランス語で「旅館」を意味する言葉ですが、ヨーロッ

パでは「レストランを核とした宿泊施設」を指します。その起源は、美食の国フランスにあり、地方や郊外の名店を訪れた客が、美味しい食事とワインを堪能した後、夜更けに都市部まで帰ることが困難になった際、シェフがそのまま泊まれる場所を提供したのが始まりと言われています。

日本におけるオーベルジュの始まりは神奈川県箱根町と言われています。1986年、フランスで修業を積んだ勝又登シェフが、日本初のオーベルジュ「オー・ミラドー」をオープンさせました。箱根は都内からわずか2時間という好立地にありながら、富士箱根伊豆国立公園に指定された豊かな自然と美しい景観が広がる場所です。

かつて、日本のフランス料理といえば「都心のホテルで味わう高級なもの」というイメージが支配的でした。しかし、1980年代のカ



「かながわの景勝50選」にも選ばれる仙石原すき草原の雄大な風景

* 株式会社フォンテヌ・ブロー、2014年卒業

ジュアルな「ビストロ」ブームを経て、1990年代以降は、サステナビリティや地産地消という概念が広く受け入れられるようになりました。そうした時代の流れとともに、日本各地に「オーベルジュ」が広まってきました。

○記憶に刻まれる「その土地の香り」

物流や情報網が極限まで発達した現代、私たちはどこにいても世界中の食材を手に入れることができるように思えます。しかし、現場で働く中で実感するのは、「その土地でしか出会えない味」が確かに存在するということです。

例えば、伊豆・湘南地域の名産である金目鯛を例に挙げましょう。金目鯛は非常に傷みやすい魚であるため、鮮度が命です。関西などの遠方でも煮付けや干物として目にすることはありますが、本当に新鮮な金目鯛の「刺身」や、熱湯で皮目をサッと湯引きにした「松皮造り」を最高の状態で味わえるのは、やはり水揚げされる漁港の近くならではの特権です。

さらに重要なのは、食事を囲む「環境」そのものです。潮の香りが漂う漁港の空気を感じながら、その季節の風に吹かれていただく一皿は、単なる食事を超えた「体験」となりま



料理とワイン、窓の外に広がる土地に想いを馳せながら戴く

す。嗅覚は脳の記憶を司る部分と密接に関係していると言われますが、旅先で出会った料理がいつまでも色褪せないのは、味わいだけでなく、その場の香りや空気が五感を刺激し、記憶に深く焼き付くからに他なりません。オーベルジュとは、そうした「記憶に残るひととき」を、ワインと料理を通じて演出する場所なのです。

○ワインは「液体となった地理学」である

ワインを語る上で、何より重要となってくるものは「テロワール」という概念です。

ワインは他のアルコール飲料とは異なり、原料である葡萄の個性を驚くほど素直に反映します。品種や樹齢はもちろん、土壌の質、日当たり、傾斜、その年の気候条件……。フランス語の「テロワール」とは、気候・土壌・地形・そしてそれに関わる人間といった、農産物の品質を決定づける環境要因のすべてを包括した、日本語に直訳することの難しいとても広い概念です。

ワインにおけるテロワールの奥深さは、同じ葡萄品種であっても、育つ場所が違えば全く異なる表情を見せる点にあります。例えば、世界最高峰の赤ワインの一つ「ペトリュス」を生むフランス・ボルドー地方のポムロール地区。ここは砂利と粘土が複雑に入り混じった土壌から、メルロー種主体で驚くほど濃密かつ優美なワインを造り出します。

同じメルロー種を使用しても土壌や気候など諸条件により全く異なるワインが出来上がります。私が経験した中で特に印象的であったのは、日本の新潟県にある角田浜（かくだはま）で造られたメルローでした。角田浜は、海岸沿いに広がる砂丘地帯です。一般的に赤ワインと魚料理は、ワイン中の鉄分が魚の脂と反応して生臭さを強調してしまうため、相

性が悪いとされています。ところが、この砂地で育ったメルローは、ヨーロッパのそれとは全く異なる「なめらかさ」を持っていました。

それはまるで、砂丘を流れる水のようにさりとしていながら、深い旨味を湛えています。このワインを魚料理に合わせたとき、まるで脂の乗った焼き魚に熱燗の日本酒を合わせるような、完璧な調和が生まれました。品種の固定観念を覆すこの体験は、まさに土地（テロワール）がもたらした奇跡だと言えるでしょう。

また、長野県塩尻市の片丘地区で造られるメルローも忘れられない一本でした。ここは北アルプスの麓に位置する内陸性気候で、日照時間の長さや水はけの良い砂礫層など、葡萄栽培にとって理想的な条件が揃っています。ここで生まれたワインは、ポムロールにも匹敵する力強さを持ちながら、日本ワイン特有の「やわらかさ」を兼ね備えていました。これほど条件が揃っていても、決してヨーロッパの模倣にはならず、日本人の好みにあう、日本での食事に適した繊細な味わいでした。

これらの違いを、単なる「味の差」としてではなく、「なぜこの味になったのか」という地理的背景から紐解いてお伝えすること。それがオーベルジュにおける食体験を、より深く、より豊かなものにすると信じています。

○結びに代えて

今や、インターネットを開けばガイドブックに書かれた情報はすべて手に入り、現地に行かなくても「答え」を知ることができます。そんな時代において、わざわざ地方にあるオーベルジュへ足を運ぶ意味とは何でしょうか。

フィールドワークに日々勤しんでいる皆さんは、体感していらっしゃることだと思いますが、写真や言葉では伝えきれない、その土地に立った瞬間の空気の重さ、肌に触れる霧の冷たさ、そして目の前で注がれたワインの輝きが確かにそこにあります。

近年、オーベルジュが国内旅行のトレンドとなっているのは、記号化された情報に飽きた人々が、五感を揺さぶる「ここでしか味わえない本物」を渴望しているからであると確信しています。

もし皆さんがどこかで「オーベルジュ」という看板を見かけたら、ぜひその扉を叩いてみてください。そこには、単なる贅沢な食事や快適なベッドだけでなく、その土地の土、水、風、そしてそれらを慈しむ人々が創り上げた、一期一会のドラマがあります。

ワイングラスを片手に土地に想いを馳せる、贅沢な一夜をお過ごしください。



中小規模公園における Park-PFI 制度の導入と課題

——東京都 A 公園を事例として——

岩下 隼人*

1965 年に都市公園法が成立して以来、面積が 2.0ha 以下の公園（本研究では中小規模公園と定義する）の整備が進んだ。現在、都市公園の多くで老朽化が進行する中、2017 年には民間事業者との協力による公園の再整備、活性化を図る新たな手法として公募設置管理制度（以下 Park-PFI 制度）が施行された。Park-PFI 制度とは、公園内の一定面積で民間事業者が事業を行ない、その利益の一部を公園運営に還元するという再整備の手法である。財政負担の減少と公園の美化、ニーズの充足を両立できるという点で大規模公園を中心に普及しつつあるが、中小規模公園においては導入が遅れている。

本研究では中小規模公園における Park-PFI 制度の導入に関して、中小規模公園に特有の課題を発見することを目的とし、以下のような調査を行なった。

- I. 全国の中小規模公園において Park-PFI 制度を導入した全事例を対象に、立地特性や再整備で得られたサービスによって公園を分類し、中小規模公園に特有の立地特性について検討する。
 - II. I で得られた情報を基に中小規模公園に特徴的な事例を取り上げ、公園周辺の居住者に対してアンケート調査を行なう。
 - III. 地域住民に対するインタビュー調査を行ない、課題を整理する。
- まず I の段階において、中小規模公園は①

都心型、②住宅地型、③地方型の 3 つに分類できることが分かった。中でも②住宅地型は、大規模公園には見られない立地特性である。また住宅地型の公園は他の立地特性を持つ公園に比べ、サービスの幅が広いことも特徴的である。コンビニやワークスペース、遊具の導入といった地域利用者に向けたサービスと、飲食店やスポーツ施設の導入などより広域からの集客を図る、商業性の高いサービスの両方が見られる。地域性と商業性を包含したニーズを抱える住宅地立地の公園は、公園によって Park-PFI 制度の導入目的、利用用途が大きく異なり、公園運営の方針決定と異なる多様なニーズへの対応の難しさを抱えると考えられる。以上を踏まえ、住宅地型を中小規模公園に特徴的な立地特性と判断した。

次に II の段階において、住宅地型の立地である東京都 A 公園を事例として地域住民を対象としたアンケート調査を実施した (n=140)。再整備事業による公園へのイメージ変化について把握することが目的である。

その結果、再整備への賛否に大きな差は見られないものの、再整備前の公園と比較したイメージの変化や提供サービスに関する質問については否定的意見が肯定的意見を 20% 以上上回ることが判明した。さらに、「周辺に長年居住している」「女性」という属性を持つ回答者が再整備事業に対して否定的な印象を

* 2026 年卒業

持つ傾向にあること、「男性」「社会人」という属性を持つ回答者が再整備に対して肯定的であることが分かった。

また自由記述欄の内容について、KJ 法によるラベリング及びグループ化を実施し、公園に関する意見を構造化した。その結果、7つの大グループ（Ⅰ．地域コミュニティ、Ⅱ．イメージ、Ⅲ．自然環境、Ⅳ．収益施設、Ⅴ．安心・安全性、Ⅵ．行政、Ⅶ．多様性）と、13の中グループ、多数の小グループに分けられた。

最後にⅢの段階では、再整備事業に反対する署名活動を行う地域住民の方々に対してインタビュー調査を実施した。本調査の目的は、公園に対する課題を住民視点で理解すること、及びアンケート調査の回答と照合し、アンケート調査で得られた課題の背景を理解することである。

先述したKJ法によって生成されたグループに、インタビューで得られた課題を含めて分類したのが表1である。グループⅠ、Ⅲは「防災」「あそび場」「休息」「自然保護」といった公園の公共的な役割が減少していることについてまとめられている。地域居住者の利用を予想して設計、利用されてきた中小規模公園が、遠方からの来客を図る機能を得たことで生じた公共性の低下、それによる公園への否定的評価は地域性の高い中小規模公園に特徴的な課題といえる。またグループⅡに関しては、面積の狭さが、対的に肥大化させている、という点で中小規模公園に特徴的な課題であると判断できる。

さらにグループⅣ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶに分類される課題に関しては、面積が狭いために公園が持つ機能が制限されることが原因となっており、それによって提供サービスや治安、行政への不満、公園内における多様性の減少といった課題が生じていると考えられる。

総じてこれらの課題は、中小規模公園に特徴的な「地域性の強さ」が、Park-PFI 制度に

特徴的な「広域的集客を前提とする商業性」と構造的に噛み合わないことが原因であると結論付けられる。地域住民が公園を「フリースペース」として様々な方法で、日常的に利用することを望んでいるのに対し、行政は「経済活性化や地域振興の場」として公園を認識している。また教育的観点や遊びの観点からの課題意識や公園のシンボリック機能に関する課題などは、いずれも地域住民が持つ公園へのイメージによって生まれたものであり、その姿は「地域外からの来園者を増やし賑わいを創出すること」を目的として再整備された公園が目指す姿とは大きくかけ離れたものである。周辺居住者の持つ公園に対するイメージや意識が、事業における課題に強く影響を与えるという点は、住宅地に偏重した立地特性を持つ中小規模公園に特徴的であると考えられる。

つまり「地域性」を重視する居住者と「商業性」を重視する行政の両者間におけるイメージの齟齬が課題の大きな原因となっており、中小規模公園において Park-PFI 制度を上手に活用するためには、その根本的な対立関係を縫合することが求められる。それは単に収益施設と公共空間のバランスが取れた場所を創出することではなく、運営者のみならず利用者、周辺居住者が主体的に空間創出を担っていくという意識によって空間を創出することによって達成される。収益施設に偏り過ぎない事業を前提として「何も無い空間」を残しつつ、行政は利用者、地域住民との対話の機会を積極的に増やし、街全体の中の公園というマクロな視点で意見を交わすこと、周辺居住者は単にサービスを受ける側としてではなく、自治体との連携や利用者同士の共助の中で公園という空間を支えていくことが求められる。

(2025 年度卒業論文要旨)

表1 アンケート調査, インタビュー調査によって得られた課題の分類

大グループ	中グループ	小グループ
I. 地域コミュニティとしての公園に関する課題	1. あそび場機能の低下	遊具への注力, 広場の減少による小学生, 中学生の減少 駐車場の設置による子供用空間の減少 教育的機能の悪化
	2. 広場機能の減少・喪失	遊具を用いない遊び利用の減少 親子でのあそび場としての利用減少 休憩所, 健康促進の場としての機能低下 周辺保育園による利用減少 防災機能の低下 シンボリック機能の喪失
II. 公園のイメージ変化に関する課題	3. 公衆衛生の悪化	早朝のごみ放棄の増加 飲食店からの臭気への不快感
	4. 収益施設による景観悪化	テナントデザインに対する否定的評価 リニューアル前の公園に対するイメージとの不一致 圧迫感の増加/開放感の減少
III. 公園における自然環境の変化に関する課題	5. 自然環境に関する否定的評価	木の減少による広場エリアの気温, 地面温度の上昇 自然現象による季節感の低下
IV. 公園内の収益施設に関する課題	6. 提供サービスに対する課題	公園内での酒類提供に対する懸念 日常利用者のニーズ, 及び公園内雰囲気とサービスの不一致
V. 公園における安心・安全性に関する課題	7. 酒類提供に対する否定的評価	深夜の飲酒者による騒音に対する懸念 酒類提供による教育的懸念
	8. 交通安全に対する否定的評価	柵がなくなったことによる飛び出し事故増加への不安 遊具エリアに隣接された駐車場に対する不安
	9. マナー違反の増加	違法駐輪の増加に対する批判 公園内喫煙者の増加に対する不満
VI. 行政に関する課題	10. 行政に対する否定的評価	行政, 事業者の説明に対する不足感 地域住民のニーズと一致しない事業案そのものへの不満
	11. コスト・経営に対する否定的評価	コストの不透明性に対する不満 収益施設の経営状況に対する懸念
VII. 多様性に関する課題	12. レイアウトによる多様性の減少	遊ぶスペースと飲食スペースの分断に対する批判 収益施設の配置による閉塞感の増加
	13. 来場者の多様性減少	特定利用者の増加/減少に対する不満 外国語表記の少なさに対する不満 経済的制約の強化による多様性の減少

2025 年度活動報告

■秋季談話会（交流会・総会）

2025 年 10 月 18 日（土）14 時～17 時に、OB 交流会ならびに総会を対面（地理学研究室・実習室）／オンラインのハイブリッド形式で開催しました。

会員（卒業生）からの話題提供として、中野洋志さん（2017 年卒業、農林水産省）からは、在学中の卒論・修論での体験や、官公庁就職後の農山村とかかわる職務について、ご紹介いただきました。また、網島聖さん（2005 年卒業、佛教大学）からは、ご自身がこれまで撮影した写真を素材として、カメラや写真資料の取り扱いについてお話いただきました。



地理学実習室での話題提供

話題提供の後は交流タイムを設け、まずは全体で、次いで話題提供者ごとに分かれて、交流を深めました。

最後に総会を開催し、会務報告（会計報告を含む）を行いました。また終了後、おむら家百万遍店にて、さらに懇親の場を設けました。

会の運営を支えてくださった大学院生の皆さん（修士課程：宇野総一郎さん、片桐潮士さん、柴田将吾さん）に、お礼申し上げます。

□総会議事録

日時 2025 年 10 月 18 日（土）16:40～17:00

会場 京都大学文学研究科地理学実習室（ハイブリッド開催）

参加者 16 名（うちオンライン 3 名）

議事

1. 会務報告

2024 年秋季談話会以降の 1 年間の会務が報告された。

2. その他

京都大学同窓会への加盟を進めることとした。測量士補資格の意義について意見交換がなされた。

□京都大学同窓会への加盟

総会での検討を承けて、京都大学同窓会に加入を申請したところ、2025 年 12 月に承認されました。これによって、地理学談話会は京大同窓会を構成する団体の一つとして位置づけられることになります。

なお、この措置によって、地理学談話会の

会員に別途会費の負担が生じることはありません。また、会員の個人情報をご本人の同意なく京大同窓会に提供することはありません。

また、京大同窓会ウェブサイト内に「地理学談話会」のページが設けられました。



<https://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/alumni/faculty-dept/literature/geo-danwakai/>

■春季談話会（論文発表会）

2026年2月14日（土）14時～18時に、対面（第6講義室・第7講義室）／オンラインのハイブリッド形式で開催しました。令和7年度の地理学専修の学位論文（博士論文1，修士論文4，卒業論文24）のうち，11の卒論と4つの修論の発表がありました。発表会場は2室に分けて実施しました。発表者および学部生を含め，40名の参加（うちオンライン3名）がありました。

座長や時計係をつとめてくださった大学院生の皆さん（博士後期課程：宰川玲さん，重永瞬さん，柴田将吾さん，修士課程：大澤淳平さん，庄子凜さん，西岡大さん）に，お礼申し上げます。

論文発表会の後，総会を開催し，会務報告ならびに本会規約の検討を行いました。

終了後，くれしま百万遍店にて，ささやかながら予餞会を開催し，卒業生・修了生の門出を祝いました。



第6・第7講義室での論文発表会



予餞会（於くれしま）

研究室便り

■地理学専修の動静

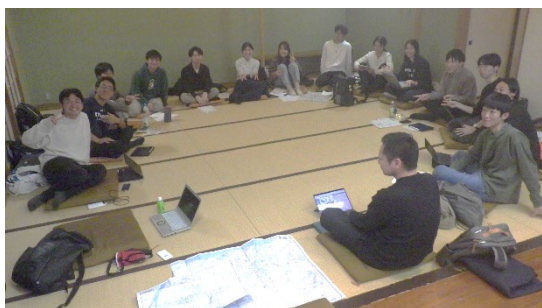
本年度（2026年度）の教室スタッフは、昨年と同じく、米家泰作教授、埴淵知哉准教授（専修主任）、杉江あい准教授、ならびに三上純子さん（事務補佐）が務めています。

昨年度末（2026年3月）には23名の学部卒業生と4名の修士修了生、1名の博士課程修了生を送り出しました。今年度は3回生19名と修士課程1回生7名、博士後期課程進学者1名を受入れ、大学院生17名（うち博士後期課程6名）、学部生35名（うち4回生26名）が在籍しています（2026年4月現在）。

2025年度の実習旅行は、2025年11月11日から14日にかけて富山市で実施し、20名（うち分属前の2回生7名）が参加しました。



富山市街地の巡検



ミーティング（富山県民会館）

■2025年度卒業生・修了生の進路

□学部

青田朗真 西日本旅客鉄道株式会社
荒谷駿介 京都大学公共政策大学院（修士）
生地涼太郎 京都大学アジアアフリカ地域研究研究科（修士）
石井晃遥 株式会社三菱UFJ銀行
井原可怜 株式会社ニトリ
勝部真衣 株式会社日本政策投資銀行
岸本優成 京都大学文学研究科（修士）
古賀聖悠 京都大学文学研究科（修士）
坂下 遼 株式会社ユーラスエナジーホールディングス

高橋公平 京都大学アジアアフリカ地域研究研究科（修士）
滝野智也 京都大学文学研究科（修士）
中山璃旺 株式会社大和総研
西堀太朗 株式会社U-NEXT HOLDINGS
光本凌大 京都大学文学研究科（修士）
矢島隼人 日本放送協会（札幌局）
山田莉子 Bain&Company

□大学院

堀川 泉 立命館大学（特任助教）
片桐潮土 中部電力パワーグリッド株式会社
高原佳穂 京都大学文学研究科（博士）
福山一茂 宮崎県庁

※掲載に同意いただいた方のみご紹介しています。

■新メンバーの自己紹介

2026年4月から新しく地理学専修に所属された皆さんの自己紹介です。

□新3回生

青山昌幸 新3回生の青山昌幸です。大阪府東大阪市出身です。趣味は、旅行と、それに伴う車や鉄道などでの移動、写真撮影です。地理学では、都市や交通分野に興味があります。よろしくお願いします。

井上 駆 3回生の井上駆です。出身は神奈川県小田原市です。市内の早川という地区に実家があるのですが、もしかしたら鉄道好きの方などはご存じかもしれません。旅行、就活などで関東へ行く機会がありましたら、ぜひ小田原にも立ち寄ってみてください！ よろしくをお願いします。

井上美慧 井上美慧です。出身は神戸で、山側を北だと固く信じて疑わない住民の一人です。人間の都市における空間と場所の認知・行動に興味があります。趣味は映画を見ることで、SF・アクション・ホラーなどが好きです。

岩崎 陽 3回生の岩崎陽です。出身は長野県佐久市です。昔から地図を読むことや旅行が好きで、高校地理は未履修ですが地理学専修に進みました。現在は観光地理学や交通地理学に興味があります。趣味は映画やドラマ鑑賞、ドライブです。よろしくお願いします。

江口隆真 3回生の江口隆真です。生まれも育ちも京都市です。大学ではボート部に所属していて、毎日早朝に滋賀県の瀬田川でボートを漕いでいます。行動地理学や観光地理学、文化地理学に興味があります。これからよろしくお願いします。

大前成太郎 新3回生の大前成太郎です。出身は広島県広島市です。GIS・計量地理学・経済地理学などに興味関心があります。空間データの公共政策への活用方法を研究したいと考えてます。最近では地理学に活かせ

ればよいなと思い、統計学を勉強しています。

大村海生 東京都渋谷区出身の大村海生です。部活動でウィンドサーフィンをやっており、日々琵琶湖に揉まれています。都市開発や都市計画などに興味があります。やりたい研究を早く見つけたいと思っています。よろしくお願いします。

黒澤陽貴 3回生の黒澤陽貴です。大阪府の吹田市出身で、阪大の裏側に住んでいます。体育会ボート部のスタッフとして活動しており、水上監視や選手たちのご飯を作っています。昔から地名に興味があり、駅名やIC、SAの名前などに関心を示していました。桃太郎電鉄で地理を学んだ系の人です。

上坂 周 はじめまして。文学部3回生の上坂周と申します。石川県金沢市出身です。地域の文化遺産をストーリーで結びつける日本遺産が好きで、休日には、日本遺産の構成資産をめぐるっています。歴史地理学に興味があり、地理学専修に入りました。よろしくお願いします。

小島光稀 大阪府大阪市城東区出身です。「立地すること」に興味があり、その延長線上でスーパーマーケットなどの商業施設に興味があります。趣味は旅行で、役所や銀行を巡ることを観光だと思って楽しんでいます。大学院まで行くかもしれません。GISを使いこなしたい。

酒井彪雅 はじめまして。岡山県から来ました、酒井彪雅です。大学では合気道と漫才、落語をしています。趣味は、友人と遊ぶこと、映画鑑賞、外でゆっくり景色を観ることです。地理学的には、田舎の風景やそこでの人々の暮らしに興味があります。よろしくお願いします。

重田晃助 新3回生の重田です。写真のサー

クルと自動車部に所属しています。授業に出るのが苦手で学業の進捗が芳しくないのですが、地理学は私が最も興味を持った分野であるため、お荷物にならないように頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

杉本祐輝 東京都から来ました、杉本祐輝です。趣味は演劇、観劇、ヒッチハイク、ドライブなどなど。主に芸術作品がどのように地域と関わっているかに興味があります。よろしくお願いします。

田中 穰 新3回生の田中穰と申します。出身はサンマでお馴染み、東京都目黒区です。趣味は合唱で、今年は合唱サークルの指揮者を務めています。地図史やメンタルマップなど、地図を描く行為そのものに興味関心があります。よろしくお願いします。

丹野啓仁 埼玉県朝霞市から来ました。陸上競技部に所属していて走高跳をしています。興味があるテーマは都市、交通、GISなど人や物の繋がりや移動に関心があります。将来は街づくりや人の移動や交流の創出に携わることができるような仕事に就きたいと思っています。

樋口真弓 兵庫県西宮市出身の樋口真弓です。台湾にルーツがあり、現在の関心は東アジアにおける移動や国際都市、複数領域に所属する人々です。ミュージカルの舞台とドラマ、写真などが好きです。ミュージカルサークルに所属していますがそろそろ引退するので、夏以降は勉強とバイト漬けになりそうです。よろしくお願いします！

兵藤 光 3回生の兵藤光です。旅行先で人間味のあるような街角の写真を撮ることが好きです。地理学における関心はまだ定まっていますが、皆さんに遅れを取らないように頑張りたいと思います。よろしくお

願いいたします。

山口恭平 学部3年生の山口恭平です。小学生まで北海道札幌市で育ち、以降は大阪府に在住しています。幼少期に親に買ってもらった都道府県パズルが地理への興味の始まりで、産業・交通・地名など幅広い範囲に関心があります。また趣味として囲碁を嗜んでいます。

若宮ちひろ 初めまして。地理学専修配属となりました、3回生の若宮ちひろです。香川県高松市出身です。ジャズのビッグバンド団体に所属していて、トロンボーンを吹いています。宗教地理学や、地域研究の方向に興味があります。よろしくお願いします。

□修士課程

杉本珠美 兵庫県宝塚市出身の杉本珠美と申します。関西大学で地理学を専攻しておりました。本年度よりこちらの地理学専修にてお世話になります。カレーが好きです。米子出身の母の影響で少し訛っていますが、生まれも育ちも関西です。よろしくお願いします。

常 暁楊 中国山東省徳州市の出身で、学部は山東大学外国語学院の日本語学科に所属していました。猫の下僕です。旅行、特に移動中の感覚が大好きです。人間やこの世界についてもっと知りたいです。研究生の時皆さんにお世話になりました。今後ともよろしくお願いします！

堀 文佳 今年度より修士課程にてお世話になります、堀文佳（ほりあやか）です。福岡生まれ福岡育ちで、3月に九州大学共創学部を卒業しました。ハルニレという樹木にまつわる文化史・表象研究を、学部の卒論に引き続き大学院でも展開したいと考えています。よろしくお願いします！

※執筆いただいた方のみ掲載しています。

■大学院生らの研究状況

2025 年度の院生らの研究成果について報告します。

□学術論文

堀川 泉「ローカルな食を用いた学校給食の存立要因―関係主体の実践と社会関係・制度の役割―」『地理学評論』99 巻 1 号, 2026 年 1 月, 22-45 頁

□学会発表

重永 瞬・柴田将吾・宰川 玲・田中琢登・馬籠翔「リズムを復原する―移動の歴史地理学に向けて―」人文地理学会大会, 2025 年 11 月 16 日, 同志社女子大学

DOI: 10.11518/hgeog.2025.0_49

吉田彬人・光本凌大「17・18 世紀熊本藩領における職人の生業と暮らし―合志郡・芦北郡を中心に―」人文地理学会大会, 2025 年 11 月 16 日, 同志社女子大学（人文地理学会学会賞（発表ペーパー部門）受賞）

DOI: 10.11518/hgeog.2025.0_51

西岡 大「物質性の観点から見た重伝建地区における修理・活用計画―鳥取県大山町所子地区を事例として―」, 人文地理学会大会, 2025 年 11 月 16 日, 同志社女子大学

DOI: 10.11518/hgeog.2025.0_61

宰川 玲「追悼空間の構築における「集会的未来」の役割―紫雲丸事故（1955）の遭難校に注目して―」人文地理学会大会, 2025 年 11 月 16 日, 同志社女子大学

DOI: 10.11518/hgeog.2025.0_83

小林夕莉「バングラデシュ農村における伝統医療と宗教の相互作用」日本南アジア学会第 38 回全国大会, 2025 年 9 月 27 日, 東京外国語大学

小林夕莉「バングラデシュ農村部における医療の多元性と人々の選択」2025 年日本地理学会秋季学術大会, 2025 年 9 月 21 日, 弘

前大学 DOI: 10.14866/ajg.2025a.0_127

TAKAHARA Kaho, “Reconsideration of Japanese early modern castle towns: Demarcation between urban periphery and adjacent villages”, 18th International Conference of Historical Geographers, July 15, 2025, Fudan University, CHINA.

SHIBATA Shogo, “Accumulation of topographical books and maps by intellectuals and their networks: Honzogaku and geographical knowledge in early modern Japan”, 18th International Conference of Historical Geographers, July 15, 2025, Fudan University, CHINA.

庄子 凜「岡山県倉敷市真備町における平成 30 年 7 月豪雨前後の住民属性変化」2025 年度東北地理学会春季学術大会, 2025 年 5 月 17 日, 東北大学

埴淵知哉・堀川 泉「クラフトビール醸造所の地域的役割―サードプレイスと社会的健康の観点から―」2025 年度東北地理学会春季学術大会, 2025 年 5 月 17 日, 東北大学

重永 瞬「戦後東京における縁日露店と浅草の闇市」2026 年日本地理学会春季学術大会, 2026 年 3 月 26 日, 法政大学

小林夕莉「奈良県の「葉草のまち」はいかにして生まれたのか？」2026 年日本地理学会春季学術大会, 2026 年 3 月 27 日, 法政大学
※共著・連名の場合, 下線が地理学専修の学生・院生を示す。

■2026 年度講義題目

今年度の地理学専修の授業構成について, ご報告します。

□講義

講義 I 地理学の成立と展開／米家泰作

講義 II 地理学の最前線／埴淵知哉・杉江あ

い

□特殊講義

南アジアの土地・水と社会／浅田晴久（奈良女子大学）

GIS と歴史資料／塚本章宏（佛教大学）

人のグローバリゼーションと地域の「これから」を考える／片岡博美（近畿大学）

ジェントリフィケーション研究／藤塚吉浩（大阪公立大学）

中国農村における生活空間の変遷／小島泰雄（京都大学）

文献講読と地域調査から学ぶ歴史地理学
山村亜希（京都大学）

都市の日常生活を捉える地理学／久木元美琴（京都大学）

アジアにおける自然と農業の諸問題／小坂康之（京都大学）

帝国と科学の歴史地理学／米家泰作

紀伊山地はなぜ歴史の舞台になったか－山村の歴史地誌－／同上

クラフトビールの地理学／埴淵知哉

地図で描く都市と地域／同上

ポストコロニアル論再考／杉江あい

津波被災地における場所の喪失と再構築－岩手県陸前高田市を中心に／同上

民俗学と地理学／今里悟之（名古屋大学）

社会的排除問題に関する地理学の学際的アプローチ／岩間信之（茨城キリスト教大学）

湿潤変動帯の自然地理学とその応用としての斜面減災論／松四雄騎（京都大学）

□演習

演習ⅠA・ⅠB／米家泰作・埴淵知哉・杉江あい

演習ⅡA・ⅡB／同上

大学院演習Ⅰ・Ⅱ／同上

人文地理学の論文を読む－都市・経済・社会の地理学を中心に／久木元美琴（京都大学）

戦国時代の地理を読む／山村亜希（京都大学）

地域地理学の再考／小島泰雄（京都大学）

□講読

英書講読Ⅰ／米家泰作

英書講読Ⅱ／埴淵知哉

□実習

地理学実習Ⅰ・Ⅱ／米家泰作・埴淵知哉・杉江あい

※所属の注記がない教員は、地理学専修の専任教員です。

■会員からの寄贈図書

昨年度、地理学専修では92点の図書・雑誌の寄贈をいただきました。ありがたくお礼申し上げます。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学専修学生共同研究室に配置し、学生ならびにスタッフの研究・教育に活用させていただいております。

以下では、談話会会員の執筆図書で、会員ご本人より受領したものをご紹介します。

- ・日本地理学会百年史編集委員会編『日本の地理学の百年』古今書院
- ・外川昌彦・杉江あい・日下部尚徳編『現代バングラデシュ－経済成長と激動する社会－』東京大学出版会
- ・京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コース『2025年度地理学実習現地調査報告書 嘉手納町』
- ・京都府立大学文学部歴史学科地理学研究室『金刀比羅宮所蔵「金刀比羅宮崇敬講社講帳」目録』
- ・水野一晴『自然のしくみがわかる地理学入門』カラー増補改訂版、ベレ出版
- ・池上彰責任編集、水野一晴著『明日の自信になる教養6 世界の見方が変わる地理学』KADOKAWA

事務局から

■2025 年度会計報告

(2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日)

【資金会計】

<収入>

年会費	72,000
寄附金	0
利子	316
前年度繰越金	220,962
計	293,278

<支出>

運営会計への振替	102,466
郵便振替手数料	4,359
次年度への繰越	186,453
計	293,278

【運営会計】

<収入>

資金会計からの振替	102,466
懇親会会費*	70,200
計	172,666

<支出>

懇親会*	70,200
講師交通費	27,658
秋季談話会経費	0
春季談話会経費	0
会報等印刷費	15,000
会報製本費用	0
通信・文具等費	59,808
弔電・供花等	0
計	172,666

* 春季談話会（予餞会）

■会費納入のお願い

1 年あたり 1,000 円を目処として、会員の方々に談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。納入の際は、下記のように、郵便振替または銀行振込をご利用ください（本会報を郵送で受け取られる会員には「郵便振替用紙」を同封しています）。

みずほ銀行出町支店（普）

1143293 チリガク ダンワカイ

（チリガクとダンワカイの間にスペースあり）

郵便振替

01080 4 21457 地理学談話会

なお、経費節減のため、郵便でなくメールを用いた諸連絡や会誌送付を進めております。本会誌を郵送で受け取られた会員で、メールで差し支えない方は、事務局までご一報いただけると幸いです。

■訃報

前号掲載以降、逝去の報をいただいた方は、下記の通りです。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

山本 輝志（1992 年卒業）

佐々木育子（旧姓：西山）（1963 年卒業）

■会員通信

□石原 潤（1962 年卒業）

京都大学文学部地理学談話会会員諸氏へ
拝啓

昭和 37 年卒業の石原 潤です。すっかりご
ぶさたしております。

実は私こと、昨年正月以来、さまざまな病
気をわずらい、特に夏以来は、認知系の病気
のため、ほとんどどなたとも交流出来なくな
りました。

幸い、夏以来バプテスト・京大・大原記念の
各病院での、通院や入院による治療により、
現在は相当回復し、訪問者を受入れる事も可
能になりました。

しかしこの間各種の活動は全てストップし、
賀状を含め、あらゆる通信を絶つこととなり、
皆様方には大変失礼致しました。

深くおわび申し上げますと共に、皆様方
ご健康を心よりお祈り申し上げます。

敬具

2026 年 1 月 20 日

昭和 37 年 3 月卒業 石原 潤

■編集後記

本号では、1959 年～1986 年に地理学教室
に在職された水津一朗先生について、戸祭由
美夫先生よりご寄稿をいただきました。また、
ソムリエとして活躍されている古田祥未さん
と、本年卒業の岩下隼人さんに、それぞれご
寄稿をお願いしました。お忙しいなか、ご執
筆くださったことにお礼申し上げます。

本会報は年に 1 回だけの発刊ではありますが、
会員の皆様のご寄稿をお待ちしております。
エッセイ執筆の構想をおもちの会員は、
ぜひ事務局までご相談ください。また、左記
の石原潤先生（1996 年～2003 年地理学教室
在職）のように、近況報告など短い通信も受
け付けております。本誌が会員諸氏の交流の
縁となるよう、今後も誌面編集に努めてまい
りますので、どうぞよろしくお願い申し上げ
ます。 (米家記)

京都大学地理学談話会 会報 第37号

発行日 2026年6月1日

発行者 京都大学地理学談話会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

京都大学地理学談話会ウェブサイト

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-danwakai/>

会報バックナンバー（京都大学学術リポジトリ「紅」）

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/259238>